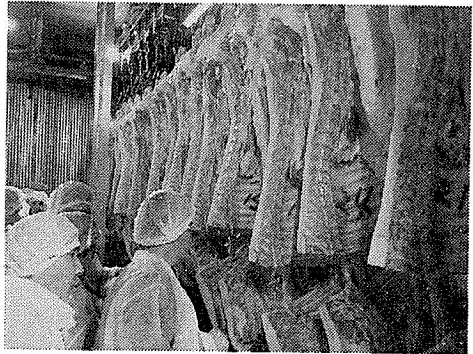


○ 肉質検討会を開催、優秀賞に桃井氏・重田氏—TOKYO X連絡会議

東京都内外の「TOKYO X」の生産者らで組織する「TOKYO X連絡会議」(榎戸武司代表)は6日、神奈川・相模原市の日本カイハツミートで肉質検討会を開いた=写真。品質向上に向けて年2回開催しているもので、当日は14人・28頭が出品。審査の結果、優秀賞に長野・松本市の桃井佐門氏(去勢、218日齢、出荷時体重114kg、枝肉重量80.0kg、と体長91.5cm、背脂肪厚3.12cm)、と茨城・結城郡の重田隆次氏(去勢、273日齢、出荷時体重120kg、枝肉重量79.0kg、と体長96.5cm、背脂肪厚2.28cm)の出品豚が受賞した。また、出品した2枝の揃いの良いものを表彰するTOKYO X—Association 会長賞には、群馬・太田市の稲村浩一氏が、さらに今年度4~9月出荷で格付「1」割合の多い農家を表彰する上半期成績TOP賞に長野・東筑摩郡の宮下次夫氏がそれぞれ選ばれた。



この日、28出品豚の約9割がTOKYO Xの最上級格付け「A」ランクとして評価された。一般の豚に比べて非常にデリケートとされているTOKYO Xは、飼育環境の違いが大きく肉質に影響する。肉質検討会では、共励会のような性格ではなく、肉質はもとより飼育環境なども確認する。Aランクが9割を占める結果となっても、「毎回様々な課題が出ているが、全体的にはかなり良くなっている。しかし、一部で締まりの悪いもの、カブリのあるもの、Xの特徴である脂肪交雑も若干少ないのも気になった。Xはサシが多く入ると共に均整が細いのが特徴だ」(兵頭勲・元東京都畜産試験場長)と厳しい指摘もあり、生産者も真剣な表情で耳を傾けていた。受賞した宮下次氏は「多頭飼育してしまうと見過ごしてしまう面もあり、並大抵の努力が必要だと改めて感じた。毎日豚は変化する。毎日豚と対話して、豚が何を要求しているのか感じ取るのが必要だ」と述べていた。

○ 大豆の食物アレルギー物質検査キット発売—日本ハム中央研究所

日本ハム中央研究所は、食物アレルギー原因物質スクリーニング検査キットの「FASTKIT エライザ Ver. II シリーズ (卵、牛乳、小麦、そば、落花生)」の新たな検査項目として、大豆検査キット「FASTKIT エライザ Ver. II 大豆」の発売を開始した。

食物アレルギーは、食品メーカーにとって重要な管理項目になっており、食品衛生法では、特定原料5品目(卵、乳、小麦、そば、落花生)の原材料表示が義務付けられ、さらに大豆をはじめとした20品目が、特定原材料に準ずるものとして表示を推奨している。今回発売した大豆検査キットは、国立医薬品食品衛生研究所を中心とした厚労省研究班の中で、日本ハム中央研究所が開発を担当し、同研究班のバリデーションに合格した唯一の大豆検査キット。大豆検査キットの使用方法は、従来の「FASTKIT エライザ Ver. II シリーズ」と同様。